

みことば

「信仰によって」聖書ヘブライ人への手紙11章23～31節

愛宕町教会牧師 宍戸俊介

本当に古い時代の話です。ここに名前が出てくるモーセは紀元前13世紀の人ですから、今から3200年以上も前に生きていた人物です。なぜこんなに古い時代のお話を聞かされるのだらうと思ったとしても、不思議ではありません。ですが、これは私たちにとって古いだけではありません。この手紙を最初に読んだ1世紀末の人たちから見ても、モーセの時代は1300年以上も昔です。もし、その人たちが聞くべき事柄として、この言葉が語られているのであれば、これらの言葉は私たちにとっても聞くべき言葉ということになるのではないのでしょうか。

そんなことを思いながら、少し注意深くこの箇所を聞いてみると26節の言葉が気になります。「（モーセは）キリストのゆえに受けるあざけりをエジプトの財宝よりまさる富と考えました」という言葉です。モーセは「キリストのゆえに」嘲られたのでしょうか？

モーセはキリストが生きたのとは全く違う時代の人です。それなのに「キリストのゆえ」の嘲りを受けたのでしょうか。実は、キリストゆえに嘲りを受けたり憎まれたりするの、キリストと同時代の人だけに限りません。たとえば、キリストから2000年近く時を隔てている私たちだって、時にキリスト者であるという理由で不当に扱われたり、仲間外れにされたり、嘲られたり、反発されるという場合があるのではないのでしょうか。

モーセはキリストよりも前の時代に生きた人ですから、モーセ自身はキリストを知りません。しかしモーセは、やがて主イエスとその民のことを思いながら十字架にお掛かりになる民の祖先を導き出しました。そして、その歩みの中で、やがて主イエスが実現される救いの業を、前もって予行演習するかのような経験を重ねました。

たとえばその誕生です。モーセは、ユダヤ人の男児を皆殺しにせよという酷い命令がファラオから出されていた時代に生を受け生まれました。そして不思議な仕方で救い出されます。これは主イエスと同じではないのでしょうか。主イエスもまた、2歳以下の男児が皆殺しにされるという酷く理不尽な状況下にお生まれになり、不思議な仕方で救い出されエジプトに逃れておられます。モーセの誕生は、キリストの誕生をはるか前に指し示すリハーサルだったのです。

それだけではありません。モーセは成人すると、それまで育てられたファラオの家を離れ、逆にファラオと対立し、攻撃される人生へと入って行きます。「はかない罪の楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐待されることの方を」選んだ（25節）。これは、主イエスの公生涯を指さすリハーサルです。また、モーセは「王の怒りを恐れず」エジプトを立ち去り（27節）、新たな生活に向かって行ったと言われます。主イエスもご自身の弟子たちを引き連れ、放浪生活をなさいました。

また、モーセは「滅ぼす者が...手を下すことがないように、過越の食事をし、小羊の血を振りかけました」（28節）。――この小羊の血の出来事は、後に主イエスご自身が十字架

上に自らの血を流すことで、滅ぼす者からご自身の民を守ってくださっています。

モーセは紅海の中を通して死の水の中に命の道を辿りましたが、これはまさに、主の教会が経験していることです。「信仰によって、人々はまるで陸地を通るように紅海を渡りました」（29節）。――主に導かれる人々も今、地上の死すべき命を生きながら、しかし主に伴われて本当に平安な人生を生きることを許されています。

もちろん、主に伴われていても、私たちの人生には、時に厳しい試練に直面する時があり、とても乗り越えられないだろうと思う程の困難を憶えることもあります。モーセに率いられた人々も、エリコの城壁に阻まれ、とても約束の地に入れないだろうと思った時がありました。けれども神様はその城壁を崩し、約束の地へとご自身の民を導き入れてくださいます。私たちも、そのような救いの歩みを生かされているのです。

モーセの人生は、そんな風に主イエスの救いを指し示すリハーサルの人生でした。そして私たちは今、主イエスが実際に開いてくださった救いの生活を信じて生きるように招かれています。主に信頼して生きる幸いな者たちとされたいと願います。

（2025年11月
金曜礼拝〈抄〉）

2025年教会全体研修会

3年連続教会全体研修会2年目

主題「教会設立80周年とその先に向かって」

講演①「礼拝とは」

②「この世の中で、教会はどのように歩んでいくのか」

講師：穴戸俊介牧師（愛宕町教会）

2025年7月26日（土）1時～3時40分（講演・80周年委員会よりの報告・分団・全体会）

7月26日（土）午後、昨年に引き続き今年の研修会も、2027年5月に迎える「教会設立80周年」を視野に入れての3年連続研修会2年目として持たれました。講師を穴戸俊介牧師にお願いし、講演後に教会設立80周年記念事業委員会より記念事業についての報告を聞いた後、分団の時を持ちました。

参加者は29名。6つに分かれての分団では、「講演について」また「80周年記念事業について」、各々盛んな意見交換がなされました。2025年教会全体研修会の記録を掲載いたします。

『いずみ』編集部

聖書

信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。

（ヘブライ人への手紙
11章1～2節）

讃美歌 讃美歌532番

【講演】
はじめに

今回は、3年計画の主題「教会設立80周年とその先に向かって」の2年目です。昨年の研修会で教えられたことは、教会が何かを記念するのではなくて、教会自体が主イエス・キリストを記念するものとして地上に建てられているということでした。教会は「礼拝をささげる」ということを通して、キリストを記念します。

信仰は、私たちが礼拝に集められ、そこから遣わされて行く教会生活によって育まれています。私たちは、何かの修行をしたり、自分一人で聖書を読んで悟りを開いてキリスト者になった訳ではありません。人生のどこかの時点で、神様が私たちに働きかけ、出会いが与えられ、礼拝に加わり、そして主イエス・キリストのことや神様の御心を少しずつ知るようになされたはずです。不思議なことですが、神様の方から私たちを招いてくださったのです。ですから信仰は、神様が招き、私たちに出会ってくださる礼拝から始まるのです。

それで、今日の研修会では、私たちが日頃ささげている礼拝の中で一体何が起きているのか、私たちがどのように神様に会い、また、キリストが共にいてくださることを経験しているのかということを考えてみようと思います。

礼拝とは？

私たちは日頃、当たり前のように「礼拝」という言葉を口にして、実際、礼拝の場に身をもち運んで神様を拝みます。けれども、「礼拝」という言葉はどういう意味なのでしょう。国語辞典では、「礼拝」は「拝むこと」と書かれていました。私たちは礼拝で、「神様を拝む」ということを行っているのです。

英語では、礼拝は「worship」とか「service」と言われます。worshipの意味は、「神や神聖なものへの宗教的崇拝、礼拝」です。この言葉の語源は、worth（価値あるもの）+ship（状態）であると説明されています。すると、このworshipという言葉は、日本語の礼拝と、とてもよく似たことを言っています。「価値あるものの前で、人間がそれにふさわしい状態になる」ということが「神様を拝む」という行動だからです。

礼拝という日本語は、文字から言ってもworshipとよく似ています。礼拝の礼の字は、元々「禮」です。示す偏に豊という字です。つまり、礼という字は「豊かさを示す」という会意形成文字なのです。隣の豊という文字は象形文字で、「豊かさ、数の多さ、豊富さ、サイズの大きさ」という、とにかく大きい価値があることを表わしています。ですから、礼拝の「禮」という字は、大きな価値がここにあるということを表わしていて、その大きな価値を拝むのが礼拝なのです。

英語でもう一つ礼拝を表わすserviceという言葉は、serveつまり「仕える」という言葉から来ています。serviceとは、「勤労、勤務、業務」で、「serveすること」という意味です。「公共事業、宗教的な礼拝、兵役」という説明もあります。serviceは、礼拝に限らずお仕えするという意味を表わす言葉ですが、これは、礼拝の時にその場で起きている出来事を表わしている言葉と言えます。つまり礼拝は、そこで起きている事柄から言うと「お互いにサービスする」ということです。まず神様が主イエスを通して人間たちのためになさってくださったサービスがあって、その神様のサービスに触発されるようにして、地上の人間たちも上に向かってお仕えするということが起きている、それがservice（礼拝）です。ですから、礼拝の時には、私たちの側は神様の御前に集まって賛美歌を歌ったり祈りをささげたりして神様のことを拝むのですが、それだけではなくて、神様がイエスさまを送ってくださり人間に奉仕してくださるということも、同じ礼拝の中で実際に起きていることなのです。神様が人間に仕えてくださるサービスと、その神様の御業を憶えて、人間の側が神様にお仕えするサービスと、そうした二つのサービスがわたしたちの礼拝の中で交錯し、交わるのです。

以前の研修会で「教会の交わり」を十字架の形に例えて話しました。十字架は縦と横の棒が交差した形ですが、横の棒だけ、つまり人間同士の交わりだけでは教会の交わりにならないことをお話ししました。縦の棒、即ち神様と私たちの交わりが見失われてしまうと、教会の交わりは中心を失って崩れてしまうことになります。とても大切な縦との交わりは、実際には、礼拝の時、神様が私たちのために奉仕してくださった御業を私たちが見上げ、その御業を憶えて感謝をささげ、讃えて賛美し神様を拝み、神様との交わりを経験する、そういう仕方です。

ですから、プロテスタント教会の礼拝で説教が大事にされるのには理由があります。聖書の御言葉を説き明かす説教を通して、神様が私たち人間のためになさってくださいましたこと、つまり、神様のサービスが私たちの前にはっきりと示されるからです。教会はそうように、地上に於いて毎週礼拝をささげること、また、私たちがその礼拝に参加することによって、キリストの御業を記念し、繰り返して感謝し賛美して、この地上に立つようにされています。

★

それでは次に、そういうキリストの御業を憶える記念が具体的にどのように行われているのかを、愛宕町教会の礼拝のプログラムに即して考えてみましょうと思います。

愛宕町教会の主日礼拝では、(1)前奏、(2)招詞、(3)讃詠、(4)交読詩編、(5)主の祈り、(6)讃美歌、(7)聖書、(8)祈祷、(9)讃美歌、(10)信仰告白、(11)説教、(12)讃美歌、ここまでが毎週の礼拝で繰り返されます。この後に聖餐式を行う週には聖餐に与り、逝去者を憶える週にはお祈りをささげます((13)a 聖餐、(13)b 逝去者記念)。その後は、(14)献金、(15)感謝の祈り、(16)頌栄、(17)祝福授与、(18)後奏と進んでいきます。

この礼拝の順序には、4つのまとまりがあります。

最初のまとまりは(1)前奏から(6)讃美歌までです。ここでは、前奏と招詞に導かれて御言葉が与えられるところまで、会衆が招かれている「御言葉への招き」が行われています。

(1)前奏から始まりますが、私たちはこの時、神様の御前へと招かれて進み出ているのです。キリスト教会には礼拝堂の前に日本の神社や仏閣のような長い参道はありませんが、前奏は、参道を歩いているような時間です。平素の忙しい日々の中で神様を抜きにして生活してしまいがちな私たちが、神様の御前に集められ、一つの神様の民に呼び集められ整列させられて、礼拝に招かれるのです。それが前奏の時間です。次に、(2)招詞が司会者によって語りかけられます。これは、私たちが礼拝へと招いてくださった神様の招きの言葉です。ですから(1)と(2)は、向きから言うと、神様が私たちに仕えてくださっている時です。

(3)讃詠は、その神様のお招きに感謝しながら、私たちが最初に讃美の声を上げる時間です。ですからここでは、奉仕の向きの矢印は下から上へ、即ち私たちが神様を見上げて、招きに感謝し賛美する時間ということになります。次の(4)交読詩編も同じです。交読詩編や交読文は、旧約の民の詩編が下敷きになっています。詩編は古い時代の神様への賛美であり祈りの言葉です。交読詩編や交読文を唱えることで、私たちは、何千年もの間、神様が辛抱強くご自身の民を持ち運び導いてくださっていたことを知るようになります。

(5)主の祈りは、私たちがささげる祈りではあるのですが、主イエスが「あなたたちはこう祈りなさい」とおっしゃって弟子たちに教えてくださった祈りの言葉ですから、この祈りは、祈りをささげているのは私たちですが、祈りを教えてくださったイエスさまが私たちのために仕えてくださる時でもあります。ということは、ここでの矢印は上から下に向かっていくことになります。神様に背を向けて祈りを忘れている私たちのために、イエスさまが祈ることへと私たちを向かわせてくださいます。(6)の讃美歌は、そんな風に招いてくださる神

様の恵みに感謝して、その招きを讃える賛美の歌です。ここまでが、「御言葉への招き」の部分です。

第2の部分は、(7)聖書朗読から(12)讃美歌までです。ここは、「御言葉の受領」が実際に行われます。礼拝に招いてくださった神様が御言葉を聞かせてくださる、聖書朗読が行われます。そしてその御言葉を聞いて、私たちが御言葉に支えられて神様のものとなって生活できますようにという(8)祈禱が続きます。ここは、神様が私たちに御言葉を語りかけ、それが私たちに届くようにと祈られている時間ですから、上から下に矢印が向かっている時間です。

そのように、神様が私たちに仕えてくださっていることに感謝する思いが、今度は(9)讃美歌を歌うことで私たちの側から上に向かって表されます。そして(10)信仰告白は神様への応答です。ここも矢印は下から上へ向かっています。信仰告白は、「日本基督教団信仰告白全文」を告白する週と、「使徒信条」を告白する週があります。

(11)説教では、矢印の向きが上から下への向きに変わります。説教を語るのは人間である牧師ですが、しかし、「神様の御言葉の説き明かしである説教は、神様の御言葉である」と信じるのがプロテスタント教会の信仰です。説教後、説教者が「御言葉の説き明かしが、それを聞いた者の中に定着することができますように」と祈ります。この祈りも、上から下への奉仕です。その後、御言葉を聞かせていただいた感謝の思いを持って、(12)讃美歌が歌われます。これは下から上への奉仕です。こうして、「御言葉の受領」の時間をすごします。

なお、(13) aとして聖餐式がある週には、そこまでが御言葉の受領の時間です。聖餐式は、「目で見える御言葉」と言われてきました。神様の御言葉は、説教による耳で聞く御言と、聖餐に与ることで実際に目で見て食べる経験をさせていただく御言の二種類があるのです。聖餐式と説教は別々の事柄ではなく、主イエスによって私たちに語りかけられ、「神様の民の一人に招かれ、永遠の命を与えられている」という約束を指し示しています。(13) bとして、逝去者記念式が行われる場合もあります。召天者を憶えて祈りをささげるのは地上の教会ですから、その場合には、奉仕の矢印は下から上になります。

ここから(15)献金までは「奉献」と呼ばれる時間です。神様が御言葉を聞かせてくださったことを受けて、地上の私たちが感謝をもって従う姿勢を表わすのが、この「奉献」の時です。(14)献金、(15)感謝(祈禱)、(16)頌栄によって神様にお仕えすることを表わすのです。(14)献金は、私たちの宝を献げることで神様の御業にお仕えする姿勢を、(15)感謝は、神様の働きに仕えて生きるように招かれたことを感謝してお仕えして歩んでゆく姿勢を言い表します。(16)頌栄は礼拝の中で私たちが歌う最後の讃美歌ですが、御業を行ってくださった神様が三位一体の神様であることを感謝して歌います。これらはいずれも神様の上からの奉仕に感謝して、下から上へと向かう奉仕です。

なお、礼拝の中で繰り返し讃美歌が歌われます。ある先生が「讃美歌の時間は、讃美歌を賛美するのではなくて、その讃美歌を歌うことで神様の御業を賛美するのだ」と教えておられました。礼拝の4つのまとまりを眺めると、大抵、最後は讃美歌で結ばれます。御言葉を聞くように神様が招いてくださったこと、実際にその御言葉をくださること、そして、私たちを神様の御業の中に加えてくださり、自分を献げるようにしてくださること、そういった一つひとつのまとまりの最後には、神様の御業を讃える賛美の歌が置かれています。神様がお仕えくださったことに対して、私たちも下から上に賛美の歌声をおささげする、それが礼拝の中で実際に起きている出来事です。そういう仕方で教会は、キリストによって行われた神様の御業を讃えながら、地上で御業を憶える記念の歩みを歩んでゆくののです。

礼拝の最後は「派遣」の時です。「献身」の思いを言い表して神様を賛美した群れの上に、神様が祝福を与えて送り出してくださるのが、(17)祝福授与です。そして(18)後奏は、(1)前

奏と逆に、神様の御前から、神様の僕としてこの世のそれぞれの持ち場へと送り出されて行く道を辿っているのです。

礼拝ではそんな風に、私たち自身が主イエス・キリストの御業の中で生きる者とされていることを憶えます。教会の礼拝は、神様が主イエス・キリストを通して私たちの罪を赦し、新しい命を与えて生きる者としてくださった、神様のなさりようがあったからこそ行われるようになっています。その意味では、礼拝の発端は上から下へのサービスなのです。その神様が行ってくださったサービスを憶えるように礼拝の時が与えられ、前奏のうちにそれぞれの生活の場から神様の御前に招かれ、御言葉を聞くことへと招かれ、御言葉を聞かせていただき、それに応答して私たち自身をお献げする奉獻を行い、そして、神様によって派遣された者となって御前から退出しそれぞれの生活に戻って行くというリズムが、礼拝を中心とした信仰生活には与えられているのです。そのことを表すのが、「御言葉への招き、御言葉の受領、奉獻、派遣」という具体的な礼拝の形なのです。

この世の中で、教会は どのように歩んでいく のか？

教会が「キリストの御業の記念として立てられている」、そして「毎週の礼拝の中で具体的な仕方でキリストの御業を憶えることを行っている」というのであれば、この世の中で教会がどのように歩むかということは、自ずとはっきりしてくると思います。この世に対して教会が行うべき事柄は、「主が確かにおられること、そして、主の救いの許に来るようにと全ての人間が招かれていることを告げ知らせることである」と言えるのではないのでしょうか。

私たちは毎週の礼拝の中で神様とお会いして神様を拝みますが、それは、私たちが個人的に行っていることではありません。教会の群れが先立って行ってくれていて、そこに私たちも招かれたので、私たちは礼拝する民の中に立たせていただけるのです。私たちに先立って神様を拝んでいた人たちは、私たちに多くのものを残してくれました。まずは信仰の共同体、教会の群れを築いてくれましたし、神様を拝むための場所と空間、すなわち教会堂も残してくれました。私たちは、そういう愛宕町教会の信仰者の遺産を受け継いで、今日この教会で礼拝をささげて生きる一員になっています。

キリストを記念する教会は、私たちが自分個人で喜んでいれば良いのではなくて、そういう営みが次の世代に受け継がれて行かなくてはならないのです。私たちも信仰の先輩たちからこの教会の群れを受け継いだように、次の世代の兄弟姉妹たちのために礼拝の場を整え、また、礼拝それ自体を手渡すようにして受け継いで行かなくてはなりません。

この「次の世代に手渡し、受け継ぐ」という点では、教会は今や高齢化が進み、若者がいないと言って心配なさる方々がおられます。確かに、今、教会の中心をなす方々の中には、青年時代にキリスト教信仰に出会い、それ以来教会生活を続けてきた方が多くおられ、そういう方々は、今日の教会の姿が昔と違うことに深刻な思いを抱く場合があるのです。けれども、日本の教会は昔は実際青年が多かったのですが、しかしその青年が全員、今日まで教会の群れの中に残っているかというと、そんなことはありません。確かに、教会の中に若者が多ければ活気づいて良いように感じますが、一方、若者の課題は、これからの自分の人生を考えるという点にあるために、その後の生き方の中で教会から離れてしまうということが多く起こりました。ですから、「青年の教会」が教会の信仰を受け継いで行く上での模範的な姿、唯一の姿ということではありません。「青年の教会」でなければ教会が無くなってしまうわけではないのです。

現に、わたしが今代務者を務めている峽南教会は言ってみれば「老人の教会」ですが、しかし、自分たちが高齢だから将来を見通せないとは全く考えていないようです。ですから、

「老人の教会」であっても、峡南教会の礼拝はとても力があって励まされます。それは、教会が「キリストを記念する群れ」としてきちんとあの土地に立ち続けていることから来ているのです。皆さんにも、あの教会の礼拝に参加し、その力を肌で感じていただけたら良いと願っています。人間的な見方から言うと、若い人たちの方が希望を持てると考えがちになりますが、一方、老人たちが必死に礼拝をささげて、キリストがこの地の人々の上にもおられることを表わして生きて行く教会は、その周りに信仰を受け継ぐ人々が与えられて行くのです。

その意味では、教会がこの社会の中に成り立って行くということに何かの名案があるわけではありません。教会がキリストの御業を記念する集まりであることを知って、御業に感謝しながら、御言葉に養われ、一人ひとりがキリストと共にある生活をその人なりに精一杯生きて行くことを通して、地上の教会は現実一步一步の足跡を地上に記し、歩んで行くことになるのではないのでしょうか。

そしてまた、教会の群れの中に抱かれている一人ひとりも、その人自身の生きた生活を通してキリストの御業を表わす、生きた「記念碑」になって行きます。私たちの生活を通して、キリストの御業が確かに行われていることが世の中に示されて行くのです。

一体どのようにして、私たちは、信仰を生活の中に表すのでしょうか。信仰によって特別な働き方をする人もいますが、しかし多くの場合、信仰はずっと静かにその人の生活に現わされるということが多いように思います。たとえば、信仰の父と呼ばれるアブラハムは、神様が彼の前に現れてくださり、土地を与えまた子孫を与えると約束してくださった時、神様から離れないために、毎日の生活の中で祭壇を築き日毎に主の名を呼んだことが、創世記12章に記されています。ところがアブラハムは、ある時点で祭壇を築かなくなって、そこから起こったことは、妻のサラをファラオの後宮に送ってしまうという失敗でした。神様のものとして生かされていることが確かめられている間は間違いなかったアブラハムも、ふと失敗してしまうのです。私たちにとって信仰は、心で強く思っている事柄ではないことを、このアブラハムの出来事は教えてくれています。

キリスト者の日常にとって、夜寝るときや食事の前、また朝起きた時などに讃美歌を歌い、御言葉を聞き、祈りをささげるというあり方は、神様から離れてしまわないように、自分の中で神様の御前で過ごす時間を確保している姿です。しかしそれは、その人個人の思いから生まれて来るものではありません。キリスト者がなぜ神様の御業を讃えて生活するのだろうかと思えば、それは、キリストが私たちのために掛かってくださった十字架の出来事が自分のためのことであつたと信じる信仰が与えられているからこそです。そしてそういう生活は、礼拝から送り出されてこそ与えられるものなのです。

最後に、今日初めにお聞きしたヘブライ人への手紙の言葉を考えながら、私たちに与えられた「信仰」を考えて終わろうと思います。

「信仰とは」とありますが、「信仰」という言葉の語源は「説得する」であり、「説得された状態」が「信仰」です。信仰は、私たちが強く思ったり握り締めるものではなく、「聞かされ、説得されている状態」なのです。説教と聖餐式によって、「あなたはわたしの者、わたしの許で生きるのだよ」との神様の言葉に説得されて歩んで行く、それが信仰です。

また、信仰とは、「望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認すること」とありますが、原文では「望んでいる」は受け身で、「望まれている事柄を確信する」とあります。私たちは、「神様から望まれているように、生かされている」、つまり「今日神様が私たちを置いてくださっている生活を生きるようにされる」のです。私たちは神様のなさりを聞かされて、今日の状況の中を「なるほど」と思わされながら、生きて行きます。

「見えない事実」は、終わりの日に明らかになることなので今は見えませんが、間違いなく「主イエスが共に歩んでくださっている」ことを、私たちは礼拝の度に聞かされています。そしてそのことを「そうだ」と説得され、イエスさまのものとして生きてきた、それが「昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました」ということです。

私たちが「神様のものとされている」と説得され、与えられている命を生きるようになっていくことを、神様は喜んでくださるのです。

このようにして、教会は礼拝をささげながら歩いて行くのです。

◆◆◆◆◆

《分団協議のまとめ》

ペトロ分団 鈴木信行

5名参加。

〈講演について〉

＊礼拝プログラムの一つひとつの意味を改めて確認し、新たな思いで礼拝を迎えられる。

＊奏楽担当者として改めてプログラムの意味を確認できたので、選曲に活かしたい。

〈今後の教会の歩み、80周年記念事業について〉

＊6畳間の礼拝から始まった愛宕町教会が旧会堂から現会堂と成長する中で教勢も伸ばしてきたが、教会員の高齢化等に伴い礼拝出席が目に見えて減少してきたことを心配している。心配ではあるが、神に委ねることで希望を抱いて伝道に励むことが大切と思う。

＊愛宕町教会は80年の歴史だが、キリスト教会は2000年の歴史があって今がある。神が働かれている。今、わたしたちに何ができるのか。自らの信仰生活を身近な人々と分かち合っていきたい。

＊減少が続いてきた礼拝出席だが、40～50名から下がっていないことに神の力を感じ、感謝。礼拝をささげることが大切で、祝福授与をいただいて後奏に神からの派遣の実感がある。

＊礼拝生活を通じて自らが変えられることを実感している。

＊かつての『産めよ、増やせよ』の時代から現在の少子化の時代へ。世の中の動向に惑わされることなく信仰的に生きることが大切。

＊80周年記念事業のための献金が、今、議論されているが、長期的な視点からの献金を考える必要がある。

＊旧統一教会の高額献金、靈感商法等の影響で、日本社会の宗教に対する見方（特に献金に対する家族等の反応）が難しい時代になっていると感じている。

ヤコブ分団 古屋秀樹

5名参加。

〈講演について〉

①礼拝とは＝礼拝の各要素のサービスの向き（神⇄礼拝者）について、礼拝がどういうものであるか分かり易く理解できたとの感想が多かった。ただ、他教派（カトリック、アングリカン、メソジスト）では、聖餐は会衆が進み出て受ける行為によってなされることから、双方向ではないかとの意見もあった。

②この世の中で教会はどのように歩いていくのか＝メンバーの殆どが、ヘブライ人への手紙11・1～2の説明が良かったとの感想だった。つまり、信仰＝説得された状態。確信するのは、私たちが望んでいる事柄ではなく神様から望まれている事柄であることに感銘を受けたという意見が多かった。「青年の教会」と「老人の教会」の説明については、2つの対立

ではなく、幼児から青年、壮年、老人まで、バランスのよい構成が将来のためにも理想なので、それが壊れている現在に対する心配はあるとの意見があった。

〈80周年の会堂改修について〉

＊この先当分の間、現会堂を使用するのであれば、トイレの本格的な改修は必要であるという意見が分団メンバーの総意であった。一方で、献金の問題については、献金の恵みについて一人の姉妹が貴重な経験談を語ってくださり、献金の恵み、献げることの恵みを共有することができた。

ヨハネ分団 宮澤陽美

5名参加。

〈講演について〉

＊信仰とは「望まれている」と聞いて、とても腑に落ちた。

＊信仰＝礼拝、御言葉をいかに聞き取るか、礼拝を守り通すことに全力を尽くす。

〈80周年記念事業について〉

＊神様がこの地に建ててくださったのだから大丈夫。

＊地域の中で生きる教会＝今、近くの教会で合唱団・カラオケサークルに参加している。

＊現在の私たちの営みが、先に繋がっていく。

＊将来の新しい兄弟に渡せるように、今、整地作業を怠らないように。

＊新しく与えられる兄弟が若者とは限らない。80歳を過ぎて受洗された兄弟に感動した。

＊会堂修繕の計画について、今は建て替えは想像出来ない。

＊次世代に繋いでいく過程の補修をする＝提示された予算で考えるのが、今出来る事か。

アンデレ分団 渡辺春美

5名参加。

〈講演について〉

＊信仰・礼拝とは何かを詳しくお聞きして良かった。

＊礼拝の順序を矢印で示されて分かりやすく、礼拝が神からの招きであることが実感できた。

＊奏楽奉仕の時、前奏・後奏が上から下への矢印だったので、後奏も喜びを表すのだから元気な曲でも良いのだと思った。

＊日下部教会のアブラハム会の話は考えさせられた。

〈80周年記念事業について〉

＊お金のかけ方について、また、どこを基準としてお金をかけるのかについて話し合っほしい、との提案があった。

＊トイレは必要最低限にとのことだったが、高齢になるとトイレはよく使うので、もう少しお金をかけてほしい。

＊トイレが狭いので、車椅子が使いづらい。障害者用トイレを何とかできないか。

＊病院の建て直しの時には、手すりトイレが一番考えなければならないこと。

＊屋根や外壁が20年、30年もったとして、トイレがこのままで20年もつだろうか。

マタイ分団 船木あゆみ

4名参加。

〈講演について〉

＊分団協議の中で『見えない事実を確信しましょう』という発言があり、講演で語られたヘブライ人への手紙11章1節は80周年記念事業と結びついている聖句だと思った。その言葉に、マタイ分団が一つになり、目に見えない力と希望が与えられた気がした。

＊興味深く感じたのは、礼拝が4つのまとまり（Ⅰ御言葉への招き、Ⅱ御言葉の受領、Ⅲ奉献、Ⅳ派遣）から成り立っていること。それぞれが矢印で示されていたので、とても分かりやすく礼拝の流れを見ることができた。主日ごとに神様から望まれていることを覚える。

〈80周年記念事業について〉

＊この会堂を維持するために必要最低限の改修工事をする。

＊外壁屋根塗装（無機塗装）耐用年数20～30年の見積もりには、床・壁紙、トイレ修繕、1・2Fトイレ塗装、小礼拝堂壁補修塗装の各工事が含まれていると説明したところ、外壁が20～30年保証されるのなら、トイレのリノベーションを希望する声が上がった。

＊問題は財源。年金生活者が多く大変だとは思うが、一人一人が痛みを覚える覚悟が必要。

＊短い時間だったが、皆で財源や献金についても考え、よき交わりの時を過ごせた。最初から最後まで主が共にいてくださった恵みに感謝。

フィリポ分団 雨宮 健

4名参加。

〈講演について〉

＊礼拝＝基本的な神様との交わり、人からの応答、それらの要素の表われを改めて認識した。

〈80周年記念事業について〉

＊2013年以降、屋根・外壁のメンテナンスはしていない。次（未来）へ繋げていく良い時ではないか。

＊献金を含め、私たちが今、出来ることをやっていくしかない。そのあり方を次の世代に見せておく必要がある。

＊トイレは便座だけでなく、全体の整備をしたい。

＊80周年記念献金は、年間目標額150万円で6～8年は妥当ではないか。

◆◆◆◆

讃美歌194番を賛美し、散会。

転入会しました

♪風は思いのままに

古屋さゆり

風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。

（ヨハネによる福音書3章8節）

この度、2025年3月9日（転入式）に愛宕町教会員として受け入れて頂きました古屋さゆりと申します。宋戸俊介先生、尚子先生、愛宕町教会の皆様どうぞ宜しくお願い致します。

私は、1971年9月に日本キリスト教団鶴川教会にて、室野玄一牧師より受洗致しまし

た。受洗記念に「夜はよもすがら泣き悲しんでも、朝（あした）と共に喜びがくる」口語訳（詩篇30篇4～5節）と書かれた室野玄一牧師直筆の色紙と讃美歌第二編付きを頂きました。

室野玄一牧師は、戦後まもなく、農村伝道神学校に献身した伯父を導いて下さった牧師です。北辺の地で開拓伝道をしてから、僅か20年足らずで召天してしまった伯父の牧師としての姿は、私の脳裏に今も焼き付いています。あの日...ポンと私の背中を押してくれたのは伯父なのかもしれない.....誰から声を掛けられた訳ではなく、自然に洗礼を受けたい気持ちになったことを思い出します。

1981年に結婚し、二人の息子が与えられました。孫も5人与えられ感謝しています。

これまで、主日礼拝、夕礼拝はもとより、様々な集会を通して学んだみ言葉と祈りに支えられ、試練の時も喜びの時もいつも、み言葉に導かれていた日々を感謝しています。

その中でも、コーラスや合奏、吹奏楽（horn）に所属していたことなどは楽しい出会いに繋がれたと思っています。姫路YMCAのハンドベルクラブに所属したことがあり、西日本区YMCA大会で演奏しました。もう、25年も前のことです。昨年の愛宕町教会のクリスマス祝会で、ハンドベル演奏を聴かせて頂いた時、とても懐かしい気持ちと、忘れていた事柄が思い出された瞬間でした。

愛宕町教会は、夫の母教会であり私も仲間に入れて頂き嬉しく思っております。そして、夫の父母が千代田霊園に眠っています。

住まいの近くから見える富士山、南アルプス、八ヶ岳、北岳など、たくさんの山々に囲まれた素晴らしい自然の中で、五感を通して日々を過ごし、愛宕町教会の出会いと交わりの中で、礼拝に与る喜びを分かち合えることを嬉しく思っています。

8月11日12日の2日間は、愛宕町教会の夏期学校に参加させて頂く機会となり、楽しい時間を過ごすことができましたことを感謝いたします。参加者全員で声を合わせて歌った♪ドンバイドンバイ

や、♪サラスポンダ他は、いつまでも心地よく、私の中に響き続けることでしょう。

神はすべてを時宣にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない。（コヘレトの言葉3章11節）

（2025年3月2日転入）

礼拝に集う喜び

内藤 梅貝

まだ肌寒い3月の初めの日曜日、愛宕町教会の入口に立って、私は、「やっと神様はこの教会に招き入れて下さるんだ」と、涙ぐんでいました。30数年間通い続けた教会が、色々な事情で行けなくなって、辛かった半年以上が経っていました。同じ思いだった友人夫妻と中に入って、牧師先生と会員の皆様方から暖かく迎え入れていただき、ホッと息をつき感謝がわき上がって来ました。

愛宕町教会は、中高と英和学院に通っていた時、すぐ近くにあり、ずっと後に二人の息子は聖愛幼稚園で、今は亡き鈴木牧師先生御夫妻にお世話になりました。英和の時のお友達からも、愛宕町教会のことはよく聞いていました。

以前の教会の牧師先生から、リモートで教会と同じような礼拝が出来るからと、私の家の座敷の床の間にスマートフォンから繋がったやや大きなテレビで、数人が集まって礼拝をしていました。リモートとかオンラインとか、どうしても教会に行くことが出来なくなった人に

とって、決して悪いことではないと思いますが、私にはやはり、体が何とか動けるうちは教会での礼拝しか駄目でした。段々と集まる人も減り、時には私一人ということもありました。先生のお話は直接聞きたい、ユーチューブの讃美歌も歌うのが嫌になりました。私達はやはり、共に集うことを大切にしたいのです。『信徒の友』9月号に、「教会に、礼拝に、集いたい」という記事が出ていますので見てください。「『一同が一つになって集まっていると』（使徒2・1）その群れに神の奉仕としての聖霊が注がれたのです。そこから一同は、感謝に満たされ賛美を歌い、神に仕える奉仕者として共に遣わされていきます。この出来事が起こることこそ礼拝です」（『信徒の友』2025年9月号、40ページ）と書かれています。

愛宕町教会に転入し、あれから7ヶ月が経ちました。皆様からやさしく導いていただき、本当に感謝しています。今、日曜礼拝はもちろんのこと、祈祷会も休まないように、バスと歩きと、車に乗せていただいたり、一生懸命に歩けるように頑張っています。今、とても幸せな毎日でいられるのは、教会の皆様のお陰です。

（2025年5月4日転入）

神様のお導きによって

西村 茂 西村 鈴子

この度は、愛宕町教会に入会させて頂きましてありがとうございます。私たちは、西村茂と西村鈴子という夫婦です。洗礼は二人とも他教会で、約20年程前に受けました。家庭の事情により甲府市北口に住所を移しましたので、教会まで徒歩で通うことができるようになりました。何より教会員の皆様が温かく迎えてくださって嬉しいです。まだ慣れなくてご迷惑をおかけすることがあるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

私たちは、生まれは夫は奈良県、私は福岡県と県外です。それぞれの家庭の事情で山梨県に来まして、もう半世紀近くになるので、県人と同じです。

夫が信仰に導かれたのは、幼い頃からの家庭環境によるものでした。戦争で父を亡くし、兄も病気で亡くして、母と二人暮らしになりました。貧困のために山梨の伯母を頼って来たのです。学費は払えないため、中学校を卒業すると大工の見習いになりました。それからおよそ20年が過ぎて、自分の家を建てることが出来ました。その後は、母の介護が必要となって、結婚とは縁遠かったそうです。教会へは、友人の紹介で通うようになりました。

私の場合は、山梨で就職して結婚しました。けれども、婚家と折り合いが悪く、3人の子どもを引きとり離婚しました。働きながら子どもたちを育てたのですが、過労で重いうつ病になってしまいました。たまたま通りかかった教会に救いを求めて通うようになりました。そこで夫と出会って再婚することが出来たのです。私は病気が癒やされていったのです。これらは全て、神様のお導きによるものと思っています。

夫は大工歴は60年程になります。最近は病気をしたり耳の聞こえが悪くなって、前のように働けません。ですが、長年の経験の知識や技術を活かして、出来る範囲でお役に立てればと思っています。

私は長く盲学校や特別支援学校に勤めて来ました。盲学校では点字が必須でしたので、点字だけはよく覚えています。ただ、教師とは名ばかりで、一緒に遊んだり運動したりの毎日でした。そして逆に教えられることも沢山ありました。ある時、全盲の生徒に「先生、皆が僕のことを可哀想というけれど、どうしてなのかなあ？僕は生まれた時から見えないから、見えることって分からない。僕は今のままで困っていることはないよ」と言われました。私自身も、障がい児のためにという意識があったのではないかと反省させられました。

思いがけない事故で、私は右手首と親指を骨折して、しばらく右手が使えない時期がありました。その時には、夫は手先が器用なので色々な事を手伝ってくれて、助かりました。でも、私が好きだった絵は描けなくなり、替わりに造花でアレンジメントをして楽しんでいます。リース作りでは夫が蔓で大きな輪を編んでくれて大きな作品も出来ました。クリスマスの時期には、皆様と一緒に作れたらと楽しみにしています。

そして、食べることと寝ること、ペットと遊ぶことが大好きな夫婦です。どうぞよろしくお願いいたします。

(2025年6月1日転入会)

コイノニアのお食事(交わりコーナー)に、ぜひ、ご参加ください！

原則、月に1度、40～50食を用意して、開催しています。

お食事を共にしながらの語らいの時、交わりの時を、ぜひ、お楽しみください。

教会設立 80周年記念事業について、役員会よりの報告

教会設立 80周年記念事業実行委員会では、教会全体研修会(2024年・2025年)の分団協議で出された意見を踏まえて、記念事業として、(1)記念礼拝・記念集会の実施、(2)80周年記念誌の発刊、(3)教会堂の営繕(修繕)の3項目を定め、協議を重ねてきました。(1)(2)については、実施に向けて、作業を進めています。(3)については、当初、「会堂の外壁・屋根塗装」と「トイレ便座・換気扇の取り換え」が喫緊の課題とされましたが、研修会の分団協議で、トイレについては全面的なリフォームを望む意見が多くありました。そこで、この項目については教会の将来構想にも関わることから、役員会主導で協議することとなり(2024年 11月)、具体的な改修案を業者に依頼し、役員会で検討を重ねてきました。その結果、役員会として、「会堂の外壁・屋根塗装」は必須であり実施すること、「会堂の外壁・屋根塗装」は実施後 20～30年の保証があることから、会堂の将来を考え、「トイレ」についても全面的にリフォームすること(下図参照)を決議しました(2025年 11月)。この改修には費用がかかるため、教会員の皆さまには「教会設立 80周年記念事業献金」をお願いすることになります。この件については 2026年度教会総会(1月 25日)に議案を上程し、総会での決議を経ての実施となります。

「教会設立 80周年記念事業献金」の概要

役員会では、各業者からの概算見積りを基に、2025年 12月役員会現在、1,600万円という数字を出し、「教会設立 80周年記念事業献金」(8年の予約献金)の目標額とすることとしました。正式見積りが出され次第、臨時役員会を開き、献金額を決定します。

今現在の概算見積り額は、*「会堂の外壁・屋根塗装」=約 900万円(施工業者:アマノ塗装店)*「トイレ全面改修」=約 600万円(設計業者:株式会社エヌプラン)*「80周年記念誌」=約 100万円(印刷業者:太陽甲府株式会社)です。

なお、役員会では 12月 28日の礼拝後に、この件に関しての説明会の時を持ち、教会員の皆さまからのご意見もお聞きした上で、来年の総会に備える予定です。どうぞ、説明会・教会総会には、万象繰り合わせてご出席くださいますよう、お願いいたします。

「教会設立 80周年記念事業」実施に向かって、必要

が満たされ進めていくことができますように、皆で心を
合わせて祈り、お献げして参りましょう。

2025年度夏期伝道実習報告

「遣わされる日のために」

東京神学大学大学院1年 梅津重信

主の名を賛美致します。この度は、愛宕町教会で夏期伝道実習の恵みに与ることが出来、心より感謝申し上げます。穴戸俊介牧師からの篤いご指導と教会の皆様からの多方面に渡るご支援・ご鞭撻の下、無事に研修期間を乗り越えることが出来ました。実習の成果は直ぐに表れるものではありません。しかし、遣わされる日のために、愛宕町教会で学んだことをしっかりと深めてまいります。つきましては、下記の通り2025年度夏期伝道実習をご報告致します。

1. 夏期伝道実習の個人的な位置付け

夏期伝道実習は長期間に渡ることから、教会における牧会者・説教者・伝道者の姿勢を間近でじっくりと学ぶ絶好の機会である。経験豊富な牧師の下で、神に仕え人に仕えるとはどういうことかを考えながら、牧会学と説教学の実践的な教育を受け、及び諸会議に出席することを通して教会運営を学んでいく。目指すところは、遣わされる日を具体的に念頭に置き、伝道師・牧師としての心構えを持つことである。

2. 夏期伝道実習期間

2025年8月2日～ 8月31日（30日間）

3. 実習内容

①聖書研究会（7回実施） ◎5日：詩編第1編、◎8日：同19編、◎15日：同27編、◎18日：同42・43編、◎22日：同50編、◎25日：同88編、◎29日：同132編、※対象詩編は当方が選出

②聖日礼拝 ◎3日：早朝礼拝／説教題「主の御声に従って」ローマの信徒への手紙8・28、使徒言行録8・1b～8、26～28b、◎31日：主日礼拝／説教題「主イエスと向かい合い」ヨハネによる福音書3・1～16、7・45～52、19・38～42

③その他説教、証し ◎10日：献身の証し（婦人会・壮年会合同例会）ルカによる福音書22・31～32、9・10～17、◎11日：救いの証し（教会学校夏期キャンプ）マタイによる福音書6・33、◎12日：早天礼拝説教（教会学校夏期キャンプ）マタイによる福音書16・13～20、◎17日：教会学校説教／列王記上7章「ソロモン王」

④教会学校 毎聖日の教会学校、中高生科分級、ひよこ分級補助、教会学校説教、夏期キャンプ（11～12日、富士山YMCA）：証し、早天礼拝説教

⑤その他（教会内） 夕礼拝、金曜礼拝、第2祈祷会、第3祈祷会、マルコの会、祈りの小団、役員準備会、定例役員会、教会設立80周年委員会、牧師勉強会

⑥その他（教会外） 峽南教会聖日礼拝、聖書に親しむお母さんのつどい（聖愛幼稚園）、第1祈祷会（聖愛幼稚園）

4. 実習状況、習得内容、感想、反省

①聖書研究会 穴戸先生より、聖書の読み方について注意を受け、アドバイスを頂いた。具体的には、信徒と牧師の聖書の読み方は違うというものである。併せて註解書の使い方を教えて頂いた。

②聖日礼拝説教 反省点として、私の説教は教えだけであり、慰めにも励ましにもなっていない点である（穴戸先生の説教の組立方法についてもお聞きした）。

③祈祷会等 穴戸先生が箴言を1章ごとに説き明かされ、集う者が説き明かされた御言葉を味わっていくものである。御言葉を通して、一人一人が神様に心を向ける良い時間を持つことが出来た。また、祈祷会について学ぶ機会にもなった。

④教会学校 教会学校説教について教案誌を基にして展開させたが、先生からは牧師たる者自らの聖書釈義で行うようにと指導を受けた。

⑤役員会等 教会で持たれる会議に同席し、教会運営の現場を拝見させて頂いた。難しい問題についても、責任を持って取り組む姿勢を見ることが出来た。

⑥聖書に親しむお母さんのつどい イエス様を知らないお母さん一人一人に、聖書の言葉を丁寧にかみ砕いて届けている伝道の現場を見学した。そして伝える機会を大切にしているところを見ることが出来た。

⑦峡南教会聖日礼拝 身延町にある教会で、無牧のため、穴戸先生が代務。教会の開拓にあっては宣教師が殉教された過去を持つ。信徒の祈りに、しっかりとした信仰を見た。キリスト者がいないように思える場所でも、置かれた場所に咲く花を見ることが出来た。

5. その他施設

①山梨英和中学校高等学校

＊宗教主任の穴戸尚子先生のご厚意により、中学生・高校生のチャペル礼拝に出席させて頂いた。また、チャペルや校舎内を見学させて頂き、生徒への御言葉の種蒔きの現場を見ることが出来た。

＊第二次世界大戦後に、グリーンバンク先生のご尽力によりカナダメソジスト諸教会と聖徒たちの祈りと献金とで、焼失した学校が再建されたことをお聞きした。

②聖愛幼稚園

＊鈴木信行先生のご厚意により、幼児教育の重要性、幼児教育制度の現状と運営上の課題等についてご教授頂いた。

＊聖愛幼稚園の教育現場を見学させて頂いた。子供たちがキリストの愛に根差した子育て支援を受けて、伸び伸びと幼稚園生活を過ごしている様子を見学することが出来た。

6. その他学んだこと

当たり前ことは誰でもする。当たり前でないことをする、それが牧師の仕事である。それが信徒に寄り添うことになる。

以上

編集後記

▼本号では、教会設立 80周年をどのように迎えるかをテーマとして、教会全体研修会 2年目の記録を掲載しました。講演の内容や、80周年記念事業に向けた話し合い、そこからまとめられた改装計画案も紹介しておりますので、ぜひご覧ください。

▼今年は受洗者は与えられませんでした。4名の転入会者が与えられ、感謝の一年となりました。クリスマスを迎えるにあたり、共に神さまの恵みを喜びたいと思います。（K.S）